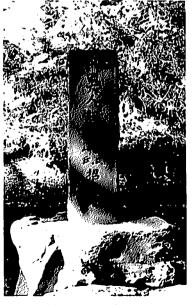
彌高叢書第一輯



△織瀬画鐡胤賛久延毗古



△織瀬夫人招魂碑

移派夫人は

伊藤 裕

著

彌高神社 平田篤胤佐藤信淵研究所

い とう ひろし

著名:伊藤裕

発行:彌高神 社

平田篤胤佐藤信淵研究所 〒010 秋田県秋田市千秋公園 1-16 印刷 株式会社 塚田美術印刷 昭和61年12月24日 改訂第 1 刷発行

目次

殺事刊行にあたって 利行のことば 自序

5

北嶋

昭

尊厳を明らめんとする「道」に傾倒していったというのである。この話の真偽の程はともかくとし だという。その本は本居宣長翁の『古事記傳』であった。翁の著書を読んだ篤胤大人は以来皇国の 屑屋から買った反古の中に余り汚れていない一冊の本を見つけて、篤胤大人に差し出したときから て、翁の教えに深く感じ入り、後に大人自身が「基の門(本居門)に入り、益々古道の上もなく尊きこと 平田篤胤大人が国学に志をかたむけたきっかけというのは、織瀬女と結婚をして後、 織瀬夫人が

この一つのきっかけに妻である織瀬女が何らかの関係をもって接していただろうと思うのであります。 を覚えまして、夫よりは只管に此の道を学び」(『気吹麩』)はじめたことは確かなことであります。

があり、 織瀬夫人に関する著書は少ない。渡辺刀水が『平田篤胤と夫人』 小説風ではあるが、大人と夫人のやりとりが興味深く、夫人の愛情のこまやかさが窺え、 (昭和十九年)を著わしたもの

大学者たる大人も夫人にささえられた面も多々あっただろうと思われます。

れたものであり、大人の威徳を顕彰する機会として、夫人の伝記をもまとめて下さったものであります。 本書は大人の研究に長い間費やしてきた著者の御尽力で、篤胤大人生誕二百年祭を記念して出版さ

ます。皆様の御理解の一助となり、また広く愛読されますことを切望して刊行のことばといたします。 している今、これを機会に再刊することにいたし、叢書の第一輯として出版することとしたのであ 昭和五十一年から早くも十年を経て、このよき著書が手許に些少となり、生誕二百十年にならんと

平田篤胤佐藤信淵研究所長彌高神社宮司

ことが、将来の指針を定める原点となる。 この頃「原点に帰れ」とよく言われる。国の内外の情勢が複雑化すると、その国の本質を見極める

の生んだ先哲であり、その思想は、わが国近代文明の黎明たる、明治維新の原動力となったことは、 ここに国学の高い価値の意義が存する。我が国、国学の四大人掉尾の偉人。平田篤胤大人は、秋田

遍く世に知られている。

の独歩」と評したことを以っても偉大さが察せられる。 その後世に対する影響力、その学の深きと広きは、弟子、 生田萬の「古今千載の一人、宇宙一萬理

豊富な資料を駆使して、織瀬夫人のことを書かれたことは、誠に時宜に適したものと喜びに堪えない。 を見出し、平田大人に奨められ、国学に志すに至った、という話があることによっても、偲ばれる。 このことは、平田大人の歌や文によっても察せられ、又織瀬夫人が、紙屑から古典の書かれたもの この大学者の功績も、夫人織瀬の所謂、内助の功によるもの大なるものがあると思われる。 現在、平田篤胤大人の研究の第一人者は、伊藤裕先生であろう。この度、伊藤先生が、その研鑚の 織瀬夫人の献身は、平田大人の大きな業績の蔭の支えとなって居ったことが、感得されるのである。 伊藤先生のご労苦に対し、心から感謝御礼申し上ぐると共に、このむが少しでも、世に裨益すると

とばとする。 最後に、この本の出版に種々奔走された、桐原善雄氏に対しても、厚く御礼申し上げ本む刊行のこ 和五十一 年四月

ころがあれば、幸甚と存ずる次第である。

前彌髙神社宮司

著者略歷

明治35年 宫城県生

昭和4年 日本大学高等師範部国語漢文科卒業

昭和5年 東京府立高等家政女学校教諭

昭和18年 秋田県教育会相「平田篤胤全集」編纂主任

昭和33年 秋田県立十和田高等学校校長

昭和34年 秋田県文化財専門委員

昭和47年 秋田県文化財保護協会会長

著書:「棕霓国文学史年表」

『大祭平田篤胤传』 他多数

論文:「古事記撰録と韓田阿礼の踊習について」

「わが国学」 他多数

なかったことについては筆者としては遺憾千万で、今後を期するより仕方がない。 に得た資料は勿論摂取したが、所在がわかりながら、何としても入手し得なかった資料を取り入れ得 た。今回、篤胤大人を奉祀する彌高神社から、前に発表したものを補訂整理して一本にまとめてほし して、さきがけ新報紙上に発表した。いろいろの反響があったので、その後も資料の発見につとめて来 夫人であった。そこで筆者は織瀬夫人に焦点をあてて調査研究し、その結果を「織瀬夫人伝覚書」と題 く発揮させた人が、篤胤大人の背後に存したことであった。その人こそ篤胤大人の畢生の愛人、織瀬 愈々その偉大性を理解し得たが、ここで筆者の痛烈に感じたことは、この篤胤大人の偉大性を最も強 らず苦しんだが、あれこれと思わぬところから資料を入手し得て、家庭人としての篤胤大人がわかり、 るべきだと考え、もっぱらこの面から篤胤大人を見極めようとした。これには資料の不足から少なか に出た篤胤大人を見ただけでは十分ではない。家庭人としての篤胤大人は如何なる人であったかを見 胤大人の偉大性をつくづくと感じ入ったことであった。大魃平田篤胤伝はかくして成った。しかし表 面から篤胤という一個の人物を縦から横からと眺めてその真骨頂を見極めようと力め、その結果、篤 なのを慨し、その正確な伝記を物にしようと志し、百方その資料を蒐集し、先学の所説を聞き、 いという要請があったので、その後に得た資料をも取りこんで、まとめあげたのがこれである。 昭和十八年、平田篤胤大人帰幽百年祭に参加した錐者はこの曠世の大学者の伝記のあまりにも不備 、新た 真正

互に六十年の不作を嘆くより外はなくなる。一旦選んだ以上は偕老同穴を契るわけだが、夫は夫とし び出すということは必ずしも容易な業ではない。聡明を要する所以である。ここで失敗したら、夫婦 て、要は要として互に相補って夫々一個の人格完成を期し、励まなければならない。そこで夫婦間で、 方としているように思える。大空の星の数ほどある無数の中から一人の男性を選び、一人の女性を選 婦であろうと思われる。この夫婦はその最初の人物選定、つまり夫選び、妻選びからして聡明な選び 存する夫婦という、夫婦のうちで最も理想的な模範的な夫婦といえば、この篤胤大人、織瀬夫人の夫 あるものか、鎌者は知らない。将来にもどれだけの夫婦ができるものかも知らない。ただこの無限に 伊邪那岐伊邪那美二柱の神代から、この国土の上に結ばれた夫婦というものは、その数はどれだけ

を夫婦生活の中に十分に伸ばすとき、夫婦共々生き甲斐ある人格を完成し得るであろう。篤胤夫婦に 最も強く働くものはいわゆる妹の力、斐女の力である。夫をはげまし、喜び勇んで奮発向上せしめる | 夫を蔑ろにし、くさらせ駄目にするのも娈女の力である。妹 (いも) の力を自覚して、その力

きである。この一言を附してこの小著のはしがきとする。

殊に織瀬夫人に学ぶところあらば、その家は必ず栄え、その国は必ず隆運を迎えること期して待つべ

昭和五十一年四月二十日

伊 藤

者

裕

織瀬夫人伝

平田篤胤は確かに曠世の大学者であった。その学業の博広なる、その学の深遠なる、その学の国家社

会に及ぼしたる影響後果の偉大なるは、殆んど絶後と謂うべきである。

ない。その学説の正当な評価解説の為にも、その生涯の徹底的究明が不可欠の要件であるのに篤胤の だしく、その評価も褒貶区々としたままであり、その生涯の伝記に至っては十分な究明がなされてい 伝といえば、養嗣子鉄胤の手に成った『大壑君御一代略記』を唯一の種本とし、それに多少の伝説やフィ ち荷田春満賀茂真淵本居宣長の三大人については、その学業についての詳密なる研究とその生涯につ いても詳密精細なる研究が行われているのに対し、篤胤についてはその学説についての研究考察も未 然るにこの稀世の大学者の伝記についてはいまだ明らかにされていない点が多い。国学四大人のう

リキイト惜シ (御一代略記、以下略記トイフ。) 予が一代記ニ自カラ記スペシト常ニハ宣(ノタマ) ヒシカド、其暇元 (ナ)クシテ終ニ成シ玉ハザ クションを附加したに過ぎないものが多い。

と、まさにその通りで四大人中年代的には最も近いにもかかわらず明らかにされないところがあま

ながら、多少の誤もあり、むき漏らしもありこの中から、妻室に関する事柄を捜索してもわずか数十 彫りにして見ることなどは思いもよらない。御一代略記は名論自称略記であって誠実丹念な鉄胤の筆の 篤胤その人の伝記が既にこの通りであるから、ましてその学者に内助の功を積んだ妻室の生涯を浮

、享和元年、八月十三日刀自君嫁シ来リ玉へり。御実家ハ駿河国沼津城主水野侯ノ藩士石橋宇 右衛門ノ女ニテ二十歳ニ成リ玉フ御名ハ織瀬君ト申ス。御子三人アリ下ニ出。

行を得るに過ぎない。

享和二年 五月廿日嫡男常太郎出生、六月廿日常太郎早世

- 一、文化二年、正月十六日 女千枝子出生、後ニ鉄胤ノ妻ト成レリ。
- 一、文化五年、四月十八日 半兵衛神楽坂ニテ出生、以上男女三人、産土神ハ筑土明神ニ坐シマセリ。
- 一、文化九年、八月廿七日(母君亡クナリ玉へり、御年三十一

とあるだけであり、その他には井上頼圀博士が先考から聞き伝えたという、ある時紙屑買いより反

古を買った中に古事記の古本があったのを夫人が見つけて

というに、なきがらは何処の土となりぬとも魂は翁のもとに往かなむ、今年先だてる妻を供ない」の条 また夫人物故の年に脱稿した霊能真柱の下巻の中に「我が魂の行方は疾くに定めおけり。そは何処 これは皇国の古史なれば必ず読み給うべしといったのが、篤胤の古学研究の発端となったという伝説。

や、気吹舎歌集の中の歌ぐらいのものである。いぶきのや

述の中にまで、その内助の功をたたえた織瀬夫人については、もっともっと詳細な伝記があって まいか。篤胤があれほどまでに熱涙を落としつつ、その死を悲しみ追慕と追憶とに悲涙をおとし著 一代の大学者の内助の人、織瀬夫人の伝記資料としては以上に尽きる。あまりに乏しいではある

然るべきではあるまいか。

篤胤の生涯の全容を明らかにするに足る資料の蒐集にいささか努力して来たが、これは一貧学究 著者はかねてから、秋田から身を起して、刻苦勉学、その学一世を震撼し、廻天動地の大業を成 の倒底能くすべき業ではなく、徒らに望洋の嘆を繰り返すに過ぎなかった。辛うじて篤胤自筇の しとげた篤胤の正真の伝記を費きたいと志し、学者としての篤胤家庭人としての篤胤を調査し、 - 系譜草稿、鉄胤筆の親類掛其の他多少の記録の断簡数種を得た。別に委く記せるものあり」と

胆したが、其の後ふとしたことから霊能真柱の初稿の断簡を得た。筆者はこれらの資料を総合し て考えると、従来よりはいくぶん織瀬夫人の像がはっきりするのを感じた。そこで覚え許を作っ あるのを是非入手したいと諸方をさがしたが得ず、曽孫盛胤翁にたづねても全く所在が不明で落

ておこうと思いたったのである。

の幾山河の旅路をたどって辛うじて江戸にたどりついたのは寛政七年(一七九五年)の春、正吉二十 生きて再び故郷の土は踏むまいと堅く誓って、久保田城下を出た大和田正吉少年は風餐雨宿の困難

とにかくこうして一人前の男にならなければ、大江戸の中で何かの職に就いて自活するのに不都合だ たに違いない。正吉少年は、江戸に着くと同時に前髪を剃りおとして、元服して半兵衛と名乗った。 略記の修飾でしかなかった。当時の秋田藩士の子としては、廿歳にしてしかも前髪などは異例であっ ら奝然として江戸には出てはみたが、まだ前髪のままの姿であった。十五歳元服も実名胤行も御一代 ての扱いも兄弟としての待遇も与えられず、とうとう士分の待遇を打切られ、下男同様の待遇の裡か の家風には容れられないものが身についてしまったらしく、父母からも兄弟からも疎外され、子とし れ落ちるとすぐ里子に出され、發子に出され、家から出たり、戻ったりの生活のうちに生家大和田家

の庭訓の如く外国の事を知る学者ではなく、皇国のことを知る博学の師をさがしたのであるが、そう まである。正吉の半兵衛のさしあたっての問題は、正義博学の師にめぐりあうことであった。父から いう師には殆んどめぐり逢えなかった。とにかく、 かくて江戸での苦学生活が始まったのであるが、それから数年の間の生活の実際は殆んど不明のま

ベキやうなかりきと後に語り玉へり外に記録ナキ故その御履歴委う知ること能はず(御一代略記)

或いは学事の為に使われ、又は仮に主取をして打過ぎ玉へること四五年、其の間の辛苦艱難云フ

とある。

当時の江戸は不景気で就職難の時代であったようだ。

正吉の幼少年時代は、肉親にも兄弟からも愛されることのないあまりに悲しい運命に育った。生ま

あった。前年には向こう十ヵ年にわたる倹約令が発せられていたし、江戸の生活はしだいに窮屈にな りつつあった。無一文の半兵衛はそうした大江戸の中で職にありつく為にどんなに苦労したことか。 昨年は楽翁侯が自ら伊豆相模の海岸を巡視したほど外国船が、近海に出没して物情騒然たる時で

記録を欠くので全くわからない。

事に馴れていたであろうが、疲労があまりにひどいので読書の時間も余力もなかったので火消人足に 境遇にあっても、 よいのを選ぶのは当然のことであった。大八車の挽子の職は重労働で、家庭で下男待遇の時から力仕 して、その子女の家庭教師のような事に従い、次に商家の飯炊き夫になったという。半兵衛はどんな 伝説によれば、半兵衛は大八車の挽子車力となり、火消し人足となり、次に市川団十郎の家に寄食 寸暇を得れば必ず読む勉学に専心するのであった。職を選ぶにも読む勉学に条件の

移ったのであった。

時の火消人足というものは至って殺伐野蛮なもので、人命などをいささかも尊重しようというような 団十郎が立派な俳優に仕立てようと大いに好遇し、子女の家庭教師のような仕事を与えたという。半 あった。半兵衛はこれを見て大志ある者の身をおく所ではないとさとってここをとび出した。とび出 のめし、それを余燼のくすぶる中に投げこんで殺してしまった。これが「ムシ死」といわれるもので 気風がなかった。或時、同僚の一人が頭取の意に逆らったところ、みんなでなぶり殺し同様にたたき したのは即ち、 火消人足は火事のないときは閑暇になるので、半兵衛には好条件と思ったからであった。しかし当 失戦であった。その後どんな手蔓であったか不明であるが、市川団士郎の食客となり、

に来たことのある半兵衛であることがわかって、藤兵衛も驚いた。これが縁となり平田藤兵衛の養子 事もなく読書の時間を得られること、殊にこの商家の台所には常夜燈があって、夜間も読書が存分に しながら、勉学していることが判明したばかりか、この飯たきは當って平田藤兵衛の門に兵学を学び るとは奇特と思い、番 頭 の平田藤兵衛 を遣わして淵 査せしめたところ、出羽佐竹藩士の子が飯たき できるという好条件があるのでとりついたのであった。篤胤は郷里にいた頃、下男待遇で飯たきも馴 給金も随って低かった。しかし半兵衛が敢てこれにとびついたのは、飯さえたけばその他には何の仕 た。ところが三年後、又警衛の任に当り再びこの呼唔の声を聞き、三年も同じように読書を続けてい 家あたりから朗々たる呼唔の声が聞こえた。板倉氏は折柄不審に思ったが、その時はそれなりになっ とであった。或る年備中松山の城主板倉氏が当番のときたまたま厠に上がっていた時、濠を隔てた商 れていた筈だから随分よい飯をたいたことであろう。飯たきが終われば早速読書に取りかかり音吐朗 か、常磐橋見附近くの商家で、飯たきを求めているということを聞いて、さっそくそこの飯たきに移 に呆れ、ここも大 志ある身 をおくべき 所でないことをさとった。それからどうした手蔓があったの 処で一応生活の安定を得たが、団十郎の期待するようにたとえ千両役者になったところで、それでは 々の吚唔の声が厨の中から霽くのであった。当時常磐橋見附は五万石以上の諸侯が当番で登備するこ ったという。当時飯たきというのは一人前の人間のする仕事でなく、半人前の人間のする賤業とされ、 わが初志の大名をあげたことにはならない。それに当時の俳優仲間の生活があまりにも猥雑醜陋なの

兵衛はここで歌舞伎についての知見を得たようであり、浄瑠璃の稽古もしたようである。半兵衛は此

衛は数年に亘る苦学生活から脱することができた。 であろう。寛政十二年その勉学ぶりと朴実な人となりとを感賞して平田家の養子に迎えられて、半兵 たという。「仮に主取もして」とあるのがそれであろう。一季半季のわたり仲間か何かで奉公したの 系譜草稿によれば商家の飯たきからすぐに平田家の登子になったのではなく、某旗本家に奉公してい に迎えられたということに伝えられているが、そのいきさつはもとより正確なことは知る由もない。

子としたが、十八歳で夭死してしまった。篤胤が迎えられたのは、その翌年のことであった。 **發母は井伊兵部少輔の藩士小林氏の出で、名はそえといった。女の子が一人いたが、安永八年にわず** 奥付を命ぜられ、牛込神楽坂の本多家の屋敷に住んでいた。半兵衛が引取られたのはこの家であった。 か三歳で早世した。その後は子が生まれず、寛政九年井伊兵部少輔の藩士山口氏の子、藤五郎を発嗣 **發父平田藤兵衛は山鹿流の兵学者で、世禄五十石寛政六年以来、板倉氏の婿に当る旗本本多修理の**

感賞して菱子に迎えたが前述の通りめあわせる娘がなかった。 篤胤はかつて篤穏の兵学の門弟であった。惓むことを知らぬその刻苦勉学ぶりと、朴実な人柄とを

くては万事都合が悪い 篤胤入家の翌年享和元年六月十六日「そえ」が亡くなった。門弟の常に出入りする家に主婦がいな

二十歳二成リ玉フ。御名ハ織瀬君ト申ス。」と見える。 十三日、刀自君嫁シ来玉へり。 そこで篤胤に新婦を迎えようということになった。御一代略記にはいたって簡潔に「享和元年八月 御実家は駿河国沼津城主、 水野侯ノ藩士石橋宇右衛門常房主ノ女ニテ

かく織瀬の少女時代継母の手によって育てられたのである。 く沼袋村の生まれ、百姓権左衛門の姉で織瀬(おきち)の二十五歳の年まで存命した。この継母につ ってきたことを覚え費きに認めている。この実母が離別された後におきちに継母がきた。実母と同じ ろ、その浄正寺は所替になって所在を失い墓碑を集め埋めて、その印に建てたという石碑を拝して弔 れば子々孫々永代我が家にて祭るべし忽怠」と眥きしるしている。後に鉄胤がその墓所を尋ねたとこ あった。おきち、清右衛門の二子を産んだが、おきちが八歳になったとき、病気のため離別し尼にな ちといい、其の後米次、さらにおりせと改めた。織瀬の母は武州豊島郡沼袋村百姓次郎左衛門の女で 川町猿楽丁森川の向かい大久保八郎左衛門に仕えていたという(鉄胤の覚え숍)。織瀬は幼名をおき いて他に何の記録もないので、おりせや清右衛門との折り合いについて何もわからない。しかしとに って、釈知法禅尼と呼ばれた。釈知法禅尼の死後、弔うものがないのを悲しんだ篤胤は「祭る人なけ 篤胤自記の覚むによれば、織瀬、おりせ、りせ、里勢とさまざまの文字を用いている。父常房は小

身分どんな役割で奉公したのか全く不明であるが、学者になろうという大志を胸に秘めて寸暇を惜ん 家相続の前方或る旗本に仕えたる時、りせはその奥に勤め居りしを」と記してある。半兵衛はどんな ないが、半兵衛と織瀬は時を同じくして、その旗本に奉公していた。篤胤の系譜草稿に、 旗本の奥勤めの中に織瀬は篤胤(半兵衛)と相知ったのであった。奉公に出た年次の前後は明らかで としてであったのだろう。その旗本の名は伝えられていないのは残念だが確かめる方法もない。その 織瀬がいくつの時か明らかでないが、某旗本に奉公に出て奥勤めをしていた。いわゆる行儀見習い 「篤胤平田

チコチのエゴイストではなかったらしく暗い陰のない明朗濶達な青年であったようだ。 望されればさわりの一くさり位さらりとやってのけたかも知れない。とにかく苦学生にありがちなコ 歌舞伎通になっていたし、浄瑠璃は殊に素人ばなれののどになっていたから、奉公の暇に朋輩がら所 人であり、柔和な人であったから人づきあいも悪くはなかったであろう。団十郎家寄食中にかなりの 博学になって居り、数年の辛酸の生活裡に相応人物もできていたであろう。篤胤は元来人なつっこい で読書に励み、かたわら平田藤兵衛について兵学の勉学にいそしんで、刻苦精励、おそらくかなりの

い。今に遺る作品から見れば古典の教養も世間並みに身につけたらしい。いわゆる十語五草ぐらいは 織瀬は奥勤めの中で稽古事はいろいろ力を入れたように見られる。中でも和歌はかなりできたらし

と書いたように半兵衛と織瀬はいつか相愛の間柄になった。まさに相寄る魂であった。 半兵衛の人となりとその異常な勉学ぶりとに織瀬は驚異と畏敬とを感じたであろうし、織瀬の教養 「あはれ、此女よ、互にいと若かりし時より親魂(むつたま)あへる由ありて」(霊能真柱初稿)

からも発見されていない と愛情とに半兵衛は心ひかれたものであろう。二人の間に贈答の歌などあったかと想われるが、どこ

時としてはどこでも認められることではなかった。殊に二人は今、武家屋敷に奉公中の身である。 武家 草稿)というところまでいった。親の許しもなしにひそかに将来を相約するというようなことは、当 が、互いの愛情は次第に深まり募っていった。ついては「親の許さざるをひそかに相約し 」(系譜

屋敷では内と表とは厳然たるけじめがあり、男女七歳にして席を同じうせず、不義は御家の御法度と

して不当なほど厳格だった時代である。

悲しい恋愛であり、 家のことであろう。ひとたび不義露顕ともなれば、不義者の名に呼ばれてお庭先に引き出され、 といったような 粋な 裁 きもないこともあるまいが、そんなのはよほどタガのゆるんだ緩 怠な家風の あった。 もっとも、もののあわれを知る、所謂 わけ知りの殿様ならば、お手打の夫婦となりしを更衣 親の許しもなしにしかも奉公中の身でひそかに夫婦約束するなどは当時としては言語道断の沙汰で 首足所を異にし、犬猫のように捨てられるのがオチである。二人の愛情が深まれば深まるほど 命がけの恋愛であった。

こうなった上は、できるだけ早く解決しなければならないはず。

命はどう変転するか分かったものではない。「自分の選んだ人を見て下さい」といって、他を拒むと ゆっくり構えて時節の到来を待つというわけにはいかない。 いうようなことのできる時代ではなかったのである。 しては当時としては婚期遅れだ。婚期に遅れないようにと他からの縁談に乗り出して来たならば、 **織瀬はやがて二十歳になる。二十歳を越** 運

どんなにか熟禱を繰り返したことであろう。織瀬の婚期遅れもさることながら、半兵衛の方とても ぐずぐずしていられるわけではない。しかし半兵衛が学者として一家を成すのは果たして何れの日 すべきかに千考万慮煩悶したに違いない。半兵衛にこういう難題にはよく神に祈る人であったから 織瀬の悶々とした胸中を半兵衛にはよくわかっていた。半兵衛は半兵衛でこの難間をいかに解決

のことか。織瀬の家は小身とは言へ、水野候の藩士、れっきとした家柄である。織瀬が何といった ところで、案性も知れない貧書生にとつがせてくれるわけがない。

として立身しなくてはならない。現在の半兵衛の境界では何ともならないのである。半兵衛は日々夜 半兵衛が石橋家に結婚を申込むためには、学者として多少世に知られるか、もしくは一人前の士分

々いかに焦燥に苦悶したことか。

をしていた半兵衛を引きとって門人にしてくれた恩義ある人である。 半兵衛に平田家の養嗣子問題の起こったのはそのころである。平田藤兵衛は、商家の飯たき奉公

その恩人が、半兵衛の超人的な勉学ぶりと朴実な人柄とを感賞して養嗣子として迎えようというの

けれども半兵衛としてはこの懇望には感激しながらもたやすくは決し兼る事情があった。というの 半兵衛としては、まさに己れを知る人の為に断乎として応じなければならぬところである。

の養嗣子となれば当然れっきとした水野藩の士として、石橋家へ結婚申込みも可能となる筈である。 は、織瀬との密約があったからである。半兵衛はこの問題に深刻な懊悩に呻吟したことであろう。 恩義ある師の藤兵衛の懇望は半兵衛にとっては世にもありがたい仕合せに違いない。兵学者藤兵衛

だがしかし、織瀬との堅いちぎりである。藤兵衛には娘がないのであるから、養子といっても夫婦養子 をしなければならない。とはいえ物堅い武家の慣習として密事(みそかごと)の上に成った織瀬との

間柄をそのまま認容してもらえるであろうか、すこぶる疑問である。

前の養子藤五郎は養母そえのゆかりの井伊兵部の藩士山口氏から迎えたのであった。 乏しいことと謂はねばならない。半兵衛はとにもかくにも、せめてその嫁だけは、養父母のいずれか ゆかりの井伊兵部藩士山口氏から迎えたのであった。半兵衛の嫁も養父母いずれかのゆかりのものを の血縁の者か、もしくは何らかのゆかりのあるものを迎えたいというのが切ない願いであろう。現に 選びたいというのが願いであろう。織瀬との密約をそのまま認めて貰うということ、これは可能性の かりのあるものを迎えたいというのが真実のところであろう。現に若死した蓌子藤五郎は蓌母そえの のだから仕方がない。せめてその嫁だけは、養父母のいずれかの血縁のものか、もしくは何らかのゆ これはとても可能性のないことであろう。平田家としては、半兵衛はかうした経緯で入家せしめた

乎として、ことわらなければならないことになる。 若しそういうことにでもなるのであれば、半兵衛としては如何なる理由があろうと養嗣子問題は断

ていては、織瀬との契約を果たす日が何れの時になるかわからない。 独立独歩、他にたよらず、名を成すというのが半兵衛の初志であった。しかしそればかりに固執し

る事があっても絶対に破却しないことを、神にかけて誓約しなければならなかった。 はじめからこの養子問題には多分の疑惑をいただいていた。半兵衛は織瀬との偕老同穴の契はいかな ことにはなるのであるが、同時にそれは堅いちぎりを破却する結果となりかねないのである。織瀬は 恩師の懇望に応ずることは、織瀬をめとる必要条件の一つ結婚申込みができる自分の身分を満たす

「己れ大志あればかねて人の家は続かじと思へりしを、さてはりせをめとること能はざることと思ひて、

われるであろう。「相談して」はおそらくは形だけで内容は「説得」であったろう。若き日の半兵衛の苦 りせと相談して平田の家の養子とはなれる也」(系譜草稿)といっているのに、その間の消息がうかが しい胸の中をうかがわせるものがある。

みであったのであろう。 半兵衛は一まづ平田家の養嗣子となる。然る後、織瀬を迎える方途をじっくりと講ずるという心組

篤胤を送り出してくれたのである。この高久も半兵衛の苦学力行ぶりにはほとほと感心し、畏敬して に同情したのは兵学の同門高久喜兵衛文吉である。文吉は篤胤の叔父になり、篤胤の家元となって、 ない。養子になるにしても、その家元とするところがなかった。江戸市中に一処も身寄りのない篤胤 織瀬に対しては自分の決意の程を明確にして来たに違いない。が胸中焦燥の念を禁じ難かったに違い り字胤とを組合せたものであった。篤胤は織瀬との堅いちぎりは深く胸に秘めていたようである。 かくて半兵衛は平田家の發嗣子となった。名を改めて篤胤と称した。藤兵衛篤穏の一字と生家の通

篤胤は高久に対して生涯その恩義を忘れなかった。(鉄胤覚書)

いたので、何かと世話してくれたのである。(御一代略記)

死にたいとあせる年齢かと思われる。だがすでに二十五にもなる養子を迎えながら、この養母の生存 篤胤が養子に入った時、養父篤穏はすでに六十九歳、養母の年齢は不明であるが、初孫の顏を見て

中に嫁を迎えることをしなかった。どうしたわけか分らない。

縁談があっても篤胤の前々から、おそれていたようなことになるので、拒みつづけたのか、それと

亡くなった。その七七日の忌が過ぎたばかりの八月十三日に織瀬が花嫁として迎えられたのである。 方の親等熟談の上にて此時に嫁し来れるなり。」 (系譜草稿) こうなるまでは叔父分高久と平田家の間に複雑な交渉が行われたようである。「種々辛苦の上にて双 むようにして、成行に気を揉んで注目していた。ところが篤胤入家の翌年六月十六日養母のそえが 切わからない。その年はそのままに過ぎた。翌年になっても全然進展しない。篤胤も織瀬も固唾を飲

も高久叔父などを介して、織瀬との密約の事を藤兵衛に打ちあけてもそれが容れられなかったのか一

である。 が、そこに語られているようである。例の高久が如何に斡旋交渉に努めたかは十分想像されるところ と篤胤は日記している。「種々辛苦の上」といい、「双方の親等熟談の上」といい容易ならざる経緯

織瀬は平田家の花嫁としてとついだというよりは、いきなり主婦の座に着かされたのである。だから

新婚の甘夢どころの沙汰ではなかった。

易でないことを見た織瀬はこの家計の中でも何とか工夫して楽しい家庭を作り、夫の勉学に支障のな いようにして行くのが、己れの使命だと当初から覚悟を堅めたようであった。 平田家の家計の上からは明るさや豊かさを期待することは到底困難であった。家計の切り盛りの容

のことを報じたかどうか、また実母の死を篤胤が知らせを受けたのかどうか、篤胤は何にも書いて 日には篤胤の実母が秋田で歿した。実母の存生中に、篤胤は、平田家養子入家のこと、織瀬との結婚 この年は篤胤の身辺は多事忽忙の年であった。六月に養母そえの死、八月に織瀬の入家、十二月六

いない。筆まめな篤胤の手記がないところから、その知らせもなかったものと思われる。

著書を見て大きに古学に志を起し、同七月、松坂に名簿を捧げ玉う」とある。即ち篤胤の思想学問の 享和元年 (一八○二年)は篤胤の生涯中でも大切な年である。『御一代略記』 に「春初めて鈴屋大人の

方向の一大転換の行われた年である。

門下がいたのであるから便宜も得られたであろう。 布していた筈だから手に入れるのにはさして困難ではなかったろう。友人に堤朝風斎藤彦満らの鈴屋 る。この「春初めて」読んだのは鈴屋本の何を読んだのか不明であるが、鈴屋本は江戸でもかなり流 ある。宣長大人の正しい学風と広大無辺の学殖とに深く傾倒し、我が学問の方向の決定を得たのであ である。平田古道学の濫觴をなす年であった。やっと求め来った正義博学の師にめぐりあえたわけで 篤胤はそれまで専ら漢字にのみ勉励して来たのであるが、この年に飜然として国学に志を起したの

のをしへに入りそめてたのしくたふとく遠じるき道になむたち入りぬれば」とあって「秋の頃」か 文化元年の稿に成る『王がつま道のしるべ』の跋に「前をとつ年の秋の頃より翁(本居宣長のこと) 鈴屋本をむさぼるように日々夜々読みふけっていたらしい。これについていささか問題がある。 先学既に説あり。篤胤は後、享和二年宣長の実子春庭の門人になっている。入門のことはともかく、 七月鈴屋入門というのは『御一代略記』の記事であるが、恐らくは筆者鉄胤の記憶遠いであろうことは、

前引井上頼圀博士が先考から聞き伝えたという「篤胤紙屑買より反古あまた買取られしが、そ 23

文いたしたる事故、是非なく其の節みな買っておいたでござる」と述べている。 あるが、本居宣長の随筆玉かつまを読み、その巻八に出ている宮永仲基の「出定後語」の存在 ある。篤胤はそのころはすでに京都の古本屋から得たのを読んでいた。「最早入りはせぬが注 た文化六年から八年前といえば、享和元年になるが、出定後語が方々の本屋から注文があるさ をはじめて知り、百方手を尽して古本屋をさがし注文して、とうとう京都から送ってもらったと 本は文化六年、京橋の山下町で古道大意、仏道の大意、俗神道大意などと共に講説したもので 語によれば、享和元年織瀬入家の後のこととなりて前の「秋の頃」というのと合致するが「春 と。依りて、 の中に古事記の古本ありしをその妻、之を見て日く「こは皇国の古史なれば必ず読み給ふべし」 い大阪の某書店で、その夏のころ土蔵の中から、その版木を見つけてあわてて刷り出したので いういきさつ長々と物語り、今年からら八年のことでござる」と言っている。この講釈をした 初めて」というのと齟齬するのみならず「出定笑語講本に見える次のこととも齟齬する。 「これを熟読玩味してはじめて皇国の古学を研究すべき志を起せりといふ」の物

二年の秋とすべきではあるまいか。 前、すでに宣長の著書を読んでいたことになる。前をとつ年の秋は、さらにその前年の秋、寛政十

して見れば玉かつまを読んだのは享和元年の夏以前でなくてはならない。どうしても結婚以

政十二年以前とすると、前に引いた織瀬入家の後、織瀬から一古事記の古本を勧められたのが、 篤胤の国学志向の年はかくて、享和元年ではなく、その年以前にしなければならない筈だ。寛

学の由って来る所を門弟達に語りきかせるとき、結婚以前の密約時代を避けて、 事記の古本を読書に無我夢中になっていた半兵衛に贈ったのではあるまいか。 だろうか。すなわち、漢字に専心精進してきた篤胤をして飜然国学に転向させ篤胤国学、 として語ったまでであって、実は織瀬との密約時代、 篤胤国学のそもそもの始まりとするのと合わなくなるが、これはこう考えることが許されない 結婚の前年ころにたまたま手に入れた古 結婚後

頃はすっかり、 そうして篤胤は古事記の研究から、 本居学に傾倒しているのではあるまい 古事記伝え古事記伝から本居学へと猛進し、 享和元年の春

以ってしても、 この翌年の著述呵妄書を見ればすでに本居学の骨髄を得ていることが、明らかで篤胤の頭脳明晰を たかが半年や一年の速成勉強でないことが明瞭である。

胤国学の端緒となった古事記の古本のことを特に挙げて奉公中朋輩の目を憚って物陰に忍んで古事記 の古本をこっそり半兵衛に手渡しした姿を追憶して、あ、平田古道学の端緒は実は織瀬が与えてくれ に追憶しているのは、織瀬入家後の献身的な内助の功をいうのであろうが、ここらの功の中には、篤 あはれ此女よ、予が道の学びを助け成せる功ここらありて(霊能真柱初稿断片)と篤胤が涙ながら

わり、研学に精進する夫に仕えて充実した一日一日を送り迎えていた。 あくる享和二年、正月には織瀬は身重になっていた。淋しい明け暮れを送っている養父篤穏をいた

たのであったと妻に対する無限の感謝を以って追憶しているのだと思われる。

正月十七日には養父は隠居願を差し出したのであるが、身体強壮なるに仍り、隠居まかりならぬと

明三年からお姫様付きを命ぜられ、その発育に当たり、本多へ御輿入りと同時に、その輿附を命ぜら れたのであるから奥方からいへばよい爺やで引止め運動もしたに違いない (系譜草稿)。 心ならずも いうことであった。おそらくは実は本多の奥方の方から内願して引き留めたものであろう。篤穏は天

老骨にむち打って、奉公にはげんでいた。

ことと喜んで、心待ちにしていた、この一家には明るさが見えて来たようである。 織瀬は正月には身重になって、苦しくなっていた。寂しい生活の中にも赤ん坊の産声の聞かされる

夫の一心不乱に進めている学業以外に心を向けさせることになり、学業の進歩の障害になることを士 襟一つ買ってくれたこともない甲斐性なしと一言いえば篤胤も一言もなくなる筈だが、そんな馬鹿な ことは絶体に口にしなかった。それは篤胤の最も痛いところである。その痛いところを突くことは、 て不気嫌を一層深刻なものにしがちなものであるが、織瀬夫人は堅くそれをつつしんだ。帯一箱、半 すれば売り言葉に買い言葉などいって平素の不満をぶちまけて互に傷つけ合ひ、言葉を投げつけあっ た。けれども織瀬は決してさからうことなく、篤胤の気分の静まるのを待った。こういうとき、とも あったらしい。何というわけもなしにやつあたりをし、むやみに織瀬に当り散らしたりするのであっ は時折ひどく不気漿 になることがあった。その 不気嫌 は自分でもどうにもならないもので

よほど悪 性の 麻 疹 だったらしくあらゆる手 当てをしてもその効なく、篤胤の神々への祈祷もその験 享和三年の夏には篤胤夫婦に悲痛なことが起こった。常太郎があかもがき (麻疹) にかかった。

た。不幸はよく続いて来るものである。織瀬の実父常房が八月十三日に歿故した。六十余歳であった を斟んでいたおじいさんの篤穏の落胆も大きかった。平田家は再びひっそりとした寂しさに閉ざされ なく、六月二十日にとうとう死んでしまった。手痛い衝撃であった。夫婦の嘆きはもとより初孫誕生

(鉄胤手記)。

愛児の死、父の死、重なる不幸に沈みながらも、篤胤の精進一路の勉学ぶりに希望をつないで織瀬

は生計に専念していた。

はげまして勤務していた。 明けて享和四年二月に改元があって、文化元年、篤穏はことしも隠居願が叶わず相かわらず老骨を

篤胤の学業の進歩は著しく、人の師となるに足るだけの造詣を積んだので、家塾を開くことにして 塾の名は「真菅(ますげ)乃屋 」、しかし入門したのはわずか三人それも同審の人ばかりであっ

作したもので、仁敬義知勇の五徳について解説した簡単なものであるが、著作出版の最初のものであ この頃篤胤は「徳行記」というものを作り、刻成して世に送った。同門の先輩名古屋の鈴木朖と合 た。

った。

家に伝えられているが、篤胤はそれに「むだごと」と題している。気吹舎歌集にはこれを「つくりう 古今風の美しいもので、実感実情などからは遠く離れた遊戯的なものであった。その歌稿は今も平田 篤胤は学事のかたわら、人なみに和歌の稽古をしていたが、師匠は何びとであったかわからない。新

た」として、真実の歌の「まさうた」と区別している。そのうち真情実感を率直に歌いあげる歌風に

移って行った。

話女房で、歌を詠んだり学問のある女となることをきらい、夫に仕え、養父をいたわり、家計に専念 たらしいが、「わがさとびたる心には、歌よみ昔のことなどよく弁へたる女は、かえってなつかしげ していくことに生きがいを見出して、歌をよむ風流どころではないというのが真実のところであった め、さては人の親しびもあしかればよまずもありなむ」といって詠むことをしなかった。あくまで世 なく、此方よりことごとのはかなさを、下には笑い居るらむと心おかるるなれば、人もさこそ思うら 織瀬にも、国学者の妻である以上、歌をたしなむように勤めたが、織瀬はもともと歌はかなり出来

を堅め進むべき将来の方向をはっきり見定め、字義通りの而立の年を迎えたのであった。 翌文化二年、篤胤はいよいよ而立の年を迎えた。篤胤はすでに自分の学問の上に確乎とした立脚地

継いで織瀬といひ、明治廿一年、八十四歳まで長寿を得た人である。千枝子の発育は至って順調であ 正月十六日、織瀬は女の子を産んだ。千枝子と名づけた。のちお長と改め鉄胤の妻となり母の名を

面影に立つ」と詠んだ。千枝子のすくすく育つのを見ては、篤胤夫婦も亡児の齢をかぞえずに居られ 六月廿日、長男常太郎の三回忌を営んだ。篤胤は「忘れねば思ひ出でねどしかすがに今日と思へば

文化二年篤胤は『鬼神新論』の初稿を書き「伊勢両宮御鎮座部類』の稿を終えた。

十一月には浄費して伊勢に送り、春庭大平にも見てもらった。本居家でも篤胤の力量をかなり、認め 平田神道学の基礎が着々築かれたのである。鬼神新論の稿が出来ると、先輩服部中庸に送って見せ

ていたらしく江戸在住門下生七人の中に篤胤をかぞえている。

篤胤の真菅乃屋はことし入門者二名を増しただけであった。養父篤穏は老衰しながらも本多家奥付

を勤めていた。隠居願はことしも却下されたからである。

物もかなりにあさっている。その研究ノートに「本教自鞭策」と名づけて、平田家の門外不出の内書 くりに心を砕いていた。 とした。真菅乃屋の門人は九人になった。織瀬に夫の学業の大成を期待しながら、心細い家計のやり 日本の神々の神髄を理解掌握すべく、西洋の宗教との比較研究も試みていた。禁制の切支丹関係の書 文化三年、織瀬は二十六歳になった。千枝子は順調に育った。篤胤の研究は神道中心に進められ、

文化四年織瀬には寂しい年であった。篤胤が医者になり、元端と名を改め、三才になったばかりの

千枝子を連れ、守山町のちの京橋の南陽町に転居して開業したからである。

迫から、 家計不如意を立て直そうとしてであろう。ただでさえ不如意の小身の窮乏の家計が板倉藩の財政逼 藩からの支給が滞りがちであり、本多家奥付の給与も僅かなものであり、活計愈々窮乏の余

学んだ医者の道だったわけであろう。それならば転居などせずに牛込神楽坂の屋敷の中で開業したら 儀なきに至ったためである。篤胤は養父の手前何かと収入の道を求めようと考えたのは、少年時代に

患者を出入りさせることは篤胤にはとても忍びなかったのである。そこで守山町開業となったが、元 町に居を移した。場所をかえたらと思ったのか家賃が滞って追い出されたのか、いづれともわからない。 名をあげて生神様だの生薬師如来だのと騒がれた篤胤も此処でも、全くはやらなかった。そこで尾張 端先生の医業はさっぱりはやらなかった。というのは当時の医者仲間の醜陋なやり方にあいそをつか 家督を継がせ、自分は軍学の平田家の養子となった人である。この医者ぎらいの養父の家で開業し、 この人はもともと西尾隠岐守の藩医の天野道順景徳の子に生まれながら、生来医業ぎらいで弟道順に よかりそうなのに、それができなかったのは、実は養父篤穏がひどい医者ぎらいであったからである。 して、その組合に入らず、孤立していたからであった (志都岩屋)。 門前雀羅、後年あれほど医道で

あった。 子を産んだ。この子には自分の若かりし日の名、半兵衛を与えた。この子は生まれながら病弱で、ど うも発育が悪かった。名を又五郎と改めたりしたが、半兵衛は文政元年九月病気で死んだ。十一歳で 文化五年、神楽坂の自宅に養父をいたわりながら、さびしい生活をしていた織瀬は四月十四 日男の

胤の名は急激に世に知られて来た。真菅乃屋の門人は十六人になった。それどころではない。ことし の学則を訂正した。それは全面的に篤胤の考えで訂正された。これからはこの訂正学則によって神職 するよう依嘱されたのである。白川家は全天下の神職を取締まる神祗省の長官である。そこで白川家 は大変なことが起こった。というのは神祗伯白川家から、諸国付属の神職に、もっぱら古道学を教授 医師元端は尾張町でもやはりはやらなかった。医師元端は一向はやらなかったが、古道学者平田篤

神道で篤胤のいう通り、俗神道俗悪な神道であった。 卜部神道の吉田三位の配下に属していた。吉田神道は純粋の神道にあらずして、儒教仏教の混雑した 祗伯の支配下にある神職は全国の約半数しかなかった。残る半数は篤胤が嘗て俗神道として罵倒した の教授をすることとなるのである。篤胤は心中その責任の重大さを痛感したことであろう。しかし神

たのである。篤胤も胸中このことを喜び自分の責任の重大であることを痛感したことであろう。 於ける地位が如何に重大であったかを知るべきであろう。篤胤はようやくその志を伸べる日が近づい つまり全国の神職はことごとく篤胤の指導下に置かれることになったのである。以て篤胤の神道界に 翌文化六年、篤胤は京橋山下町に移った。もう医者はやめ、もっぱら古道の講説に力を注いだ。 ところが後年に至って吉田家からも、その配下の神職に指導するように依頼されることになった。

古道学の立場から儒教の弊を批判し、仏教を批判し、俗神道を批判攻撃し、歌道を説き、医道を説

説き方で、目に一丁字もない者にも感動を与えずにはおかない熱烈巧妙なものであった。 生来の能弁に任せて縦横無尽に説き来たり、説き去り、俗耳にも入り易い、しかも興味ある平易な

篤胤はいっそう力が湧き強烈深刻な批判というよりは猛烈果敢な攻撃になっていった。 その痛烈な批判は果然儒者僧徒からの猛烈な執拗な反駁が起こった。その反論が強くなればなる程、

はとても太刀打ちなどできるものではなかった。篤胤はこの講説の為に完全な原稿―一言一句口で語 儒者僧徒はその批判攻撃に対して反論を試みたところで篤胤の尖説な論法と底知れない蘊蓄の前に

る通りの口語の原稿を作ったのだが、その努力も大したものであった。

の理由のあることで、実は篤胤の自筆の原稿そのものを出版したのであった。 これが後年に整理訂補されて出版される時、門人何某筆記などと記してあるが、それには別な特別

この奮闘的舌戦講説は各方面に容易ならぬ敵を作ることになったが、同時に国学者篤胤の名声を天

講説に励むかたわら「伊勢物語梓弓」という註釈本の稿を急いでいた。

下に高からしめたことは確かである。

わらず窮乏で、織瀬のやりくりの苦労は絶えなかった。それに篤穏は七十七歳、この三月隠居願が 篤胤の奮戦闘力のような勉学精進も、収益の増加につながらなかった。 だから家計はいつも相か

二人扶持になったのだからひどい減俸である。お役御免になった篤穏は急激に老衰して、その十 やっと聴届けになり、「生涯二人扶持被下之」ということになった。俸禄五十石(実は五十伎)が

月六日病歿した。織瀬の昼夜を分たぬ看病も元端篤胤の手を尽した治療も定命には抗し得なかった。 も少々早かったので、 儀は至って簡 素であった。同じ長 屋の人 々のほか、山下町、守山町の人々が六人、 **葬送に間に合わず、寺に駆けつけたのが、織瀬の実兄清右衛門、** 篤胤 葬送の時刻 の叔父分

髙久文吉その他四人という寂しいものであった。(篤胤自筆覚書) の野送帳の末の覚書には

メー歩二朱」とある。 「一ばん桶のうすいはこ、丸れんだい、高桃灯二張かり位牌、たらひ、ひしやく、なわ、ござの代金 簡素というよりはあまりに貧弱な葬儀であったのだ。人倫に厚く情誼にこまや

かな篤胤夫婦も貧窮していては如何ともなし得なかったものと見える。

教の害毒を説くには七万八十巻の大蔵経を三度も読むというやり方であったから、その説く所、鋭鋒 翌文化七年、篤胤は講説に油が乗って盛んに説きまくった。儒学の病弊を説くに儒書を以てし、仏

医道大意を整理補訂して「志都乃岩屋」の稿本とした。

当たるべからざるものがあった。かたわら前年講説した台本を整理することにした。

らずの生活であった。 織瀬は神楽坂のお長屋を出て、山下町に移り、家族同居、干枝子六才、半兵衛三才親子四人の水入

翌文化八年篤胤三十六才、春から講義の台本を整理補訂して

道

大

意

神道大 意

俗

学 大 意

道 大 Ċ.

仏 漢

医 道 大 意

歌 道 大 意

Ŧ 須 喜

などの多数のいわゆる「大意」本を作った。

なものである。この大意本作製のために寸刻を惜しんで精励した。全く寝食を忘れての精励であった。 この大意本は平易な口語で綴られ、一読直ちに理解し得るもので、平田国学入門書として最も好適

この為寸刻も惜しかった。

費斎の入口に次のような貼紙をして無駄話の来訪防止をはかった。

疑問の外呼ぶことなくば来べからず。道義論弁の事に於ては終日終夜の長談たりとも些か厭い 此節別して著述取急ぎに付、学用窮理談の外、世俗無用の長談御用捨可被下候塾生と雖も学事

共一人作画

五月

篤胤

着て蒲団に寝るのみであった。それ以外は机によりかかって座唾するだけであったという。 昼夜兼行の強行軍のような勉学ぶりで、篤胤は六斎(月六回の休日)の日だけは袴を脱ぎ、

父親で一体に愛情濃やかな夫で、学者の家にありがちなひややかさなどというものは無かった。 その怒りがおさまるように仕向けるので、その怒りがをさまれば、ふだんのやさしい夫であり、 織瀬は時折り、 わけもなく叱られたり、当りちらされることもあったが、織瀬は決してさからわず、

ラな勉学が師の健康を害しはせぬかと気遣った、門人たちが気保養させてあげようという意図で、旅 が駿府にでかけ、 この年の十月、 織瀬は結婚後初めて寂しい思いをした。というのは駿河の門人たちの招きで、篤胤 翌年の春まで家をあけたからである。実は篤胤の昼夜兼行の寸刻を惜しむガムシャ

ところが駿河の門人、柴崎直古の家に行って見ると、このことを伝え聞いた遠近の門弟達が寄って、

に連れ出したというわけである。

完成するようにと神に祈誓して執筆にとりかかったが、願の通り、大晦日の夜半までかかって不眠不 **書物を数部借りあつめそれを資料として著述にとりかかった。それは十二月五日のこと、大晦日まで** がけながら、背けなかったものを此処で揩こうと思い立ったのである。そこで門弟達の持ち合わせの に明け暮れて早くも十二月になった。篤胤は柴崎家の静かなひと間に閉じこもって、かねて徘こうと心 たかって平素疑問にしていることを質問して来るので、とても気保養どころではない。門弟達の応対

休の超人的な努力で

古史成文 初稿

口 史 徴 初稿

篮 能 真 柱 草 笨

を作り上げた。

の短日月になし得たことは、自己の力ばかりでは到底不可能と思へたし、神々の恩頼によること大な 述は、いわばこの三部の書の註脚とも敷衍とも見られるべきものである。わずかの参考書でしかもこ 其の中、古史成文、古史徴、筮能真柱の三部は平田国学の骨髄を成すもので、その後の幾等身の著

ることを考え、全く奇跡としてしか考えられなかった。

どを詠みつつ、その帰りをひっそりと待ちわびていた。 を思って、「もしや妻子への愛情が簿れたのではあるまいか」などと心を痛めながらさびしい旨の歌な 織瀬はこの超人的奮励努力の執筆だとは知る由もなく、年末にも、年始にも帰宅しない夫の旅の空

この短い期間にこれだけの草稿が出来たのであった。どんなに嬉しかったことか。 と幾度か。そのつど神々に熱祷をささげ、神頼の筮感によって、前人未発の見解を得ては筇を進め、 って、神々の恩頼に奉謝の誠をささげた。執筆中難関に逢着してにっちも、さっちもいかなくなったこ 『古史成文』『古史战問』『霊能真注』の草稿を書き上げた篤胤は、文化八年十二月大晦日の夜半感極ま

れし、其は駿府にて也、平田篤胤」と踊るような、はね上がるような文字で婆表紙に背きつけた。 「此古史上巻或問共に辛未十二月五日の日より筵を起し、其大晦日の夜までに初稿し睾んぬ。あなう

草稿を、 国学の根本精髄をなす三部の背の初稿は、駿府の旅先で、しかも不十分な参考背を以って背いた、この **真柱の名を上げてないのは、いまだ片成りの覚え背き程度のものだったからであろう。ともかく平田** その古史上巻が「古史成文神代部の初の名。或問とあるのが改められて「古史徴」となった。霊能 江戸に持ち帰って補訂脱稿するのを楽しみに雪の消えるのを待って駿府を辞し、箱根の峠を

超えた。

く、三月に入ると寝たり、起きたりの容態になってしまった。子供がいるので完全な静養ができなか ったのである。 健康異常を看過ごすわけがない。さっそくその治療にとりかかったのであるが恢復がはかばかしくな しかるに織瀬はどうしたことか、ひどく衰弱して元気がなかった。篤胤は医者であってみれば、この から、篤胤は草鞋の紐も解かず、大少もとらず、子を次々抱き上げて頬ずりなどしたことであろう。 千枝子は八歳になり、半兵衛は五歳になって、母と共に久しぶりに帰った父を喜び迎えたのである

かつて霊能真柱の概要だけを揩きあげたとき、織瀬に見せると、非常に喜んで、いつもは詠むことを しなかった歌など詠んで称賛してくれた書である。この書は人の霊魂の行きつくところは、どこかに 篤胤は霊能真柱の稿を急ぎながらも、このことが心にかかって、いつものように筆が進まなかった。

ついて究明したものである。

労も一通りではなかった。母親はこの二人の子がいじらしくていじらしくて泣くより他なかった。 不きげんになり、腹を立てて泣いたり、わめいたりするのでそれをだましたりすかしたり、義勝の苦 うに効験が見えない。衰弱は一日一日と甚だしく篤胤も気が気でなくなった。門弟の山野義勝という に一心に祈請した。「此の病癒さずばやまじ(霊能真柱)」と千々に心を砕いたのである。が、 に専念した。今は読書や執筆どころではない。万事を放擲して愛妻の病を癒すべく、自分の持つ医療 のが忠実に仕えてゐた。二人の子どもがよく義勝になついてゐたが、母の病勢が進むにつれて子供が の術の限りを尽くし、更に知友からの知慧をかりもして朝も夕も懸命に努力し、神々にいつものよう 「義勝や、わたしが死んだら、この子供を頼みますよ。」などと心細いことを息も絶え絶えいうよう そうこうしているうちに病勢はどんどん募って行った。篤胤は夜も昼も枕頭につきっきりで、看病 いっこ

にも悲惨であった。二十歳の年、姑のいない家に嫁いで花嫁から一足飛びに主婦の座について、乏し とった。夫を思い、子を思い、まだ三十一歳という若さで、はかなく消えて行った織瀬の死はあまり 医術の限りを尽くし、神々に祈っても、その験現われず、その八月廿七日織瀬はとうとう息を引き

心学事に勇猛精進する失をはげまし、まめやかに仕えて十二年、その失がいよいよ世に出ようとして いる時にもろくも、ついえに織瀬の生涯はあまりにもあわれであった。 い家計のやりくりに心を労し、老いた舅に仕え、生れつき病弱な子の養育に辛労し、一切を捨てて専

愛婆の死にはさすがの篤胤も気が転倒して、

天地の神は無きかもおはすかもこの禍を見つつますらむ

た篤胤は、かねて剛腸をもって自任していたが、只々慟哭するより他なかった。葬儀の日のこと、亡 あまりの悲嘆に神々をも、うらむような歌さえよまずにいられなかった。文字通り最愛の婆を失っ

き母の納棺を見た千枝子と又五郎は

ゃま早く出して。」 「お母ちゃまをどうしてそんなところへ入れるの、早く早く出して、出さなくちゃだめだめ、お母ち と泣きわめきながら、人々をひっかくのを見た篤胤は「ほとほと魂も消えなむとする」思いで涙を

野辺送りがすんで、篤胤は二人の幼児をかかえて途方にくれた。ひっそりと家に籠って、亡き妻の

冥福を祈るのみだった。

予このごろそとや、物々しく気長になりつれど、もとは 横紙破りの 腹あしき性にて怒のつのりては、 りしにと相爱の仲となった頃から、結婚前後の苦悩、以来十二年の辛酸な生活、追憶は果てしもない。 「若かりしより、親魂(むつたま)あへる由ありて、男女(めをと)となりて、十二年がほど親しめ

知りつつも、すぢなきことを呵りののしりしを」と悔やまれるのであった。

るのであった。悔恨の念に落涙し、断腸の思いに嗚咽した。こうした悲嘆の明け暮れに、二人の子を これからどう養育したらよいものかと思いなやむのであった。 のいたづきの因となりて煩い、この死に至ったのだ」と思うと、千恨万悔自貴の念に堪えられなくな いじらしいまでに夫思いであった斐の姿がしのばれてその心根が、篤胤の涙をさそった。まして「そ 道の学びにいそしむことを悦び、心の如く功を立てしめんといたく心を砕き助け成せしに」と思えば そのどのやうな怒りにも不きげんにも「いささかも意にたがえることなくまめやかに仕えて篤胤が

生みの母がまた出で来とも、この母の心配りにあに如かめやも

と啖くのであった。

ものがあった。見れば詠草である。折りから訪ねて来た門人の堀尾安房守と二人でとつおいつよんで ある日亡妻の居間の取片付けをしようとまくらべにあったものを整理していると何か書き散らした

うばたまの夢路にだにもわがせこにあひて心をやるよしもがな

見ると、去年の冬駿河にものして、久しく帰らなかった頃のすさびらしい。

玉桙のいそしむ道の道遠み夢にも君が見えぬなるべしさよ衣かへしでぬれど夢にだに見えこぬせこにこがれでぞなく

月久に相見ぬからにわがせこが人に心のよりにけむかも

篤胤は涙しながら読み、読んでは泣いた。篤胤はきわめて物堅い人で終世浮いた噂など絶対にない 39

人であった。「人に心のよりにけむかも」には隠傲な女性心理に深く感ずるところがあったようであ

これに驚きて此時なむ妹しのぶ歌はひねり出だしける。

妹こそはここらの事をなし竞えでともにといひし言をたがへつ

かどをいでてかえり来ごとに母が名をなほよびまどふ此子らあはれ

あれほど堅く結んだ偕老同穴の契り反故になったことをうらみつつ追慕の情は綿々と限りなくつづ

きりぎりすなくや霜夜のさむしろにかたしく衣のぬひもあらなく 霜さえおきていと寒けれどかさぬべき衣もなきにきりざりすなく

きりぎりす汝はしらずやしばなくはつづれさすべき人のあらなくを

きぬたをき

うつ人はさしもしらじなから衣もの思う袖のぬるるころとは

なほかけるものの見えぬがありてちり籠に捨てたる反故の中をたづねけるにそれは

見えでそのくしけづれる髪のおちたるなど交りありけるに

やるせなく妹思ふやみに黒髪の乱れてそれとわかぬくるしさ

追慕は尽きない。せめて夢の中でもよい、常の面持の亡斐に会いたいと念じて寝た夜妹は常のごと

ありて、かの病にくるしみぬと思えるははや夢にてありし夢を見て、あくるつとめて

40

夢の中に見ししこ夢はさめて、その現の夢のさめざらましを

篤胤の切々たる慕悄を想うべきである。更にいふ。

助成して然るにみじき功をなさしめしことをしのびて、女々しとは人はい うともよしゑやし、この に、去年の冬駿河にて二十日あまり五日がほどに、古史の神代の巻二巻と或問かけて造れりし時、 かの或問にかける如くいと奇しきこと有りしは、妹が幸魂(さきたま)か奇魂(くしたま)なども しねばしきかも、妹がなしし事ごとに末かけて篤胤が道の学びに幸あらしめむとのみせしを思う

織瀬に対する追懷と追慕は綿々として尽きるところはなかった。

わが情たれ知らめやも

繖瀬の法号は「月窓妙心信女」であった。

しかし古道学者篤胤を今日あらしめた内助の功の大きさを思えば、この法号ではとても物足りなか

貞操院道弘助成大姉

った。系譜草稿に

と記して、その功と徳とをたたえ、その下に、「これは篤胤がつけたる也」と自ら記しておる。 篤胤は愁然と沈んで説むも執難もしなくなってしまった。まるで全身から魂がぬけてしまったよう

に悄然として亡妻の面影をしのんで、落涙し嗚咽するばかりであった。知人友人もしきりに慰めてく

哀てふことの限りを知れとてや世の憂きことを吾に集へけむ

赤根さし日はくもりなく昭らせれど

と、日に日に傷悴するばかりであった。知人も友人も篤胤のこの傷悴をどうすることもできなかった。 しかし、さすがは篤胤である。その本領に目ざめるときがきた。織瀬の終生の念願は夫の学業の大

成であった。亡妻の霊を慰める為にも精魂をしぼらなければならない。

柱の稿の完成への作業であった。これこそ、織瀬が生前に草稿を一説して、 あながちに利心(とごころ)を振り起して再び学業に立ち向かった。そしてその第一者手は霊能真 「かく弱りなむも妹が心ならねば」と織瀬の心に励まされて「いわゆる四十九日の事して身深く破ひ、

盤ちはう神のまことをますかがみさやかにとける盤の真柱

することが根本であることを説き、その行方は如何なるところかを明確にしたものである。 と称賛して呉れたものである。この書は人間の精神を堅固にするには、死後、霊魂の行方を明らかに

志を成さしめる為のはげましであり、愛護であった。貧究の一苦学生篤胤として、曠世の大学者たら 主飼育法」だの「亭主訓練法」だのという、それではない。ほんとうに夫も同心一体になって。夫の くてはならない。「妹の力」の体大さを忘れてはならない。この織瀬夫人の内助は現代よく聞く、「亭 ある。篤胤の畢生の事業、古道学の大成の功を考えるとき、この織瀬夫人の内助の功を考え合わせな しめ、篤胤の初志を見事に貫徹させたのであった。妹の力の偉大さである。 この妻にして、この夫あり、この夫ありて、この娈あり、この娈ありて、この夫ありと謂うべきで